

汽水域研究会 ヤマトシジミ研究部会

設置の目的

ヤマトシジミは古くから親しまれた食材であり、汽水域生態系において重要な役割を果たしている生物である。しかし、最近では資源量が不足しており、更にカビ臭の着臭などいろいろな問題が発生している。宍道湖においても、カビ臭の着臭やかつてみられなかった冬季の大量斃死など大きな問題が頻発しており、このままでは資源量の維持が懸念される状態になってきている。本研究部会は、当面、宍道湖を中心とした山陰地域の汽水域を対象にヤマトシジミの資源量維持を目的として、ヤマトシジミを取り巻く環境変化やヤマトシジミの資源量維持のために望まれる対策について検討していく。

背景

宍道湖におけるヤマトシジミ漁業は宍道湖漁業の基幹をなしており、日本の代表的な生産の場である。ヤマトシジミは漁業資源として重要なばかりでなく、宍道湖の生態系の中でも重要な役割を果たしている。しかし、最近はカビ臭の着臭や冬季の大量斃死などかつてみられなかった事象が頻発している。

宍道湖の水質変化を見ると、有機物指標である COD や窒素やリンなどの濃度は横ばい状態が続いており、特に悪化の傾向は見られていない。しかしながら、かつて重要な漁獲対象であったアマサギはほとんどその姿を消し、コノシロの大量斃死が起きるなど、生物相の変化は激しい。ヤマトシジミのカビ臭もカビ臭プランクトンの多量発生によるものであることが次第に明らかになってきており、生態系の高次に位置する生物から次第に低次に位置するプランクトン組成まで変化が顕在化してきている。

しかしながら、このような生物の変化についてのデータ整理は十分に行われている状況になく、またその原因も明らかでない。ヤマトシジミの問題もこのような宍道湖の生物相変化の流れの中で理解することが重要であり、水質や宍道湖を取り巻く環境変化を踏まえた上で議論していく必要がある。

活動内容

当面意見交換を中心に活動するが、体制が整い次第実体解明に向けた調査研究活動を行う。

宍道湖を対象とした当面の課題

- 1) 水温・塩分の経年変化(温暖化影響はどの程度あるのか?)
- 2) 生物相の経年変化(生物相はどう変化しているのか?)
プランクトン・ベントス・魚類・水草
中海との関係は?
- 3) 水質はどう変化しているか?
(水質変化・底質変化・湖岸環境変化)
- 4) 現状はどうなっているか?
カビ臭調査の状況
ヤマトシジミの大量斃死の状況
宍道湖におけるヤマトシジミの漁業を通して見た状況
- 5) 課題の整理

上記の議論を踏まえた上で課題の整理を行い、調査研究体制を検討する。